



## 6. 議 事

### (1) 前回議事要旨

第13回宇宙開発委員会(定例会議)議事要旨案(資料委14-1)の2頁下から10行目の発言者を「吉識」に修正することとし確認された。

(2) 昭和55年度8,9月期ロケット打上げ計画について宇宙開発事業団の平木理事及び長島打上管制部長より資料委14-2に基づき宇宙開発事業団のロケット打上げ計画について説明が行われ、以下の質疑応答ののち同打上げ計画が了承された。

八藤： TT-500A型ロケット8号機頭胴部の回収手順について説明されたい。

長島： 頭胴部の回収は、クレーンを装備した1,000トンクラスの特種作業船1隻、300トンクラスの支援船2隻及びセスナ機2機を用いて行われる。

これらは予め落下予想区域の境界に待機し、着水と同時にシーマーカー及びラジオビーコンを目標に捜索が行われる。航空機が発見した場合は回収船への位置の通報及びシーマーカー、ラジオブイの投下が行われ、これを目標に回収船が回収に向うことになる。

なお、本実験は、昨年11月行われた高空落下回収実験及び今年3月行われた伊豆大島沖合の回収試験の経験を踏まえて行われるものである。

八藤： 今回の実験は、航空機及び船舶を用いるといったこれまで経験のないものであることを考え、安全面に十分配慮しながら行ってもらいたい。

吉識： 昨年行われた実験と比較してどのような改善がなされているか。

平木： 昨年の実験では、3個の供試体を用意し回収を試みたが、1個はパラシュートが開かなかつたため、他の2個は供試体を吊るロープが切れたため、海中に没し所期の目的を達成できなかつた。このため、今回は、パラシュートの開傘を確実にするとともに、ロープに十分な強度をもたせ、同様の失敗を繰り返さぬようにしている。

斎藤： 搭載装置の機能確認が目的とあるが、供試体を載せるのか。

平木： 供試体を載せ実験を行うが、搭載装置の機能確認に重点を置いた実験となつている。

斎藤： セスナ機による捜索は大丈夫か。

長島： 本実験で用いられる航空機は、種子島、小笠原間の追跡業務の引継ぎ試験に使用しているものであり、長時間飛行の経験がある。捜索時間に6~7時間さくことができるので、時間内に発見できると考えている。

また万一の事故に対しても十分に配慮してある。

斎藤： 今回の実験は宇宙に経験のないユーザーが参加し、また、宇宙開発事業団及びメーカーにとつても未経験であり、更には、500kmも離れた所での回収実験であるため、十分

慎重に行ってもらいたい。

八藤： この実験の費用分担はどうなっているのか。

平木： 搭載実験装置までは宇宙開発事業団が負担し、実験に  
用いられる供試体は実施者の負担となっている。

このうち、事務局より参考配布資料昭和55年度8、  
9月期ロケット打上げ計画一覧に基づき東京大学宇宙航  
空研究所のロケット打上げ計画について説明が行われた。

←行かす。